

ジャノメチョウは、日本全体の同属種分布上ではごく普通種とみなされるが、昆虫少年時代を過ごした高知では、海拔 1400m の大豊郡梶が森の山頂部に広がる草原地帯までいけば出会える珍しいチョウのひとつであった。登山者がたどるモウセンゴケなどが自生する赤土の小道をはずれて、ちょっと草原へと踏みこむとまず飛び出すのが精悍なウラギンヒョウモンで、すごいスピードで複数頭が飛び交うこととなる。そんな中、ヒョイヒョイと現れて上下にはずむような飛翔をみせたあと、すぐに草むらに止まるのがジャノメチョウだ。高知市周辺の平地でこのチョウに出会った記憶はなく、ウラギンヒョウモンとともに高知ではかなり山奥へと出かけないと見られないチョウであったことは間違いない。

ところが、8月の発生期に信州を訪れると、車道沿いの人家周辺でもちょっとした草むらがあるとあちこちでピョンピョンと飛んでいる。雌雄間で色彩斑紋に差のあるチョウで、♀個体は♂にくらべて例外なく大型である。ちょっと目には決して美麗だとは思えないチョウで、微妙な自然の造形美をめぐることにない少年期に、梶が森でこのチョウを追いかけた記憶はない。

兵庫県高砂市に居を移して自然環境が多く残る加古川市志方町に出かける機会が増え、絶滅危惧種Ⅰ類選定となったヒメヒカゲの野外調査に力を注ぐようになって以降、まるでヒメヒカゲの発生が終わるのを待っていたかのように、同じ草原一帯を飛び交い始めるのがこのジャノメチョウだ。加古川の里山・ギフチョウ・ネット・メンバーのO氏からの情報では、2011年6月末、草原の斜面一帯をおびただしい数のジャノメチョウが飛び交っていたという。2010年のヒメヒカゲ発生状況調査の際に、メンバーのM氏が偶然ショウジョウスゲの根元に潜むピンクを帯びた淡褐色の本種幼虫を見つけ、白水隆著「日本蝶類標準図鑑(2006)」にショウジョウスゲも食草のひとつとして知られていることがわかって、このショウジョウスゲが多い草原にヒメヒカゲ、ウラナミジャノメ、そしてジャノメチョウの3種が少しずつタイミングをずらしながら発生する背景に納得したものだ。



ちょっと目には美麗ではないと書いたが、実は、よくよく観察すると決してそうではない。2008年8月にキベリタテハの多産を楽しんだ松本市扉峠で、長野飯山市から観光にみえたご婦人たちにたまたま現れたジャノメチョウをネットインして実物を見せてあげると、眼状紋のなかにルリ色の鱗粉がちりばめられていることに一様におどろかれ、記念にと写メを撮る婦人もおられたほど。このときはそのまま飛ばしてやったが、ルリ色鱗粉がきれいに出了(参照：鳥取大山山麓で観察できた♀)個体の標本も残しておく必要があり、今後、そういう視点で観察し直してみよう。左図は信州ドライブ旅行の帰りに立ち寄ったサービスエリア片隅の木陰で休息している♀個体である。撮影角度をもっと水平位置にとれるとよかったのだが、人の気配に非常に敏感なチョウだけに、この位置からしか記録を撮れていない。裏面後翅のグラジエントがかかった雲状模様には、自然の芸術作品ともいえる気品があると感じるのは私だけではないと思うがどうだろうか。



はないと思うがどうだろうか。